

# 魔法科高校生の鬼球

UKIWA

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

元王牙学園サッカーチームキャプテンであるバタツプは雷門中との試合において多くのことを学び、それはその後の人生を大きく変え、平和な世界のために皆を導く総理大臣へとなった。そして彼は寿命を迎えた。

だが、彼の魂は、彼の人生はまだ終わりを迎えてはいなかった。

彼は新たな世界に転生し、そして世界はまた動き始める。

目次

プロローグ	1
入学式Ⅰ	4
入学式Ⅱ	9
入学式Ⅲ	15
入学式Ⅳ	19
入学式Ⅴ	25
入学式Ⅵ	29

## プロローグ

俺はあの時理解した。サッカーはこんな俺でも、俺たちでも変えてくれる。彼らの闘争心は熱く、他の忘れ去らてしまうものだった友情、仲間ものを知らせ、自分達を変えてくれた。そして俺達は自分達の自由のために世界を正しく導いていくと決めた。

今では辛いときもあつたあの頃もいい思い出だ。そして今はこうして仲間と共に自分の最後を迎えられる。またもう一度あの時の高揚、胸の高鳴りを味わいたかった。だがもうそれが叶うことはない。後悔はないとは嘘になるが、また生まれ変わるのならまたあの時のようにサッカーを皆で…

この年、元王牙学園サッカーチームキャプテンであり、元総理大臣である『バダップ・スリード』は寿命を迎えた。それは人として必然であり、人として誰しも受け入れることになる死を彼は自身で予期していた。彼の魂は何処へ逝くのかそれはこれからの話であり、新たな物語である。

「つつ…!!(んん)は?」

何故だ?俺は確か病院の一室で…。

「やつとお目覚めかい?少年くん」

少年?俺はそんな年では…ん?体がこれは!?

「驚いたかい?体は君の一番状態がよかった高校生せいぐらいの体にしておいたよ」

体が若返つてるだど?俺達の知る知識ではこんな技術は無かつたはず。それに、ここは病院の一室というわけでもなさそうだなそしてこの少年は?」

「お前は誰だ!?!」

「僕かい?僕の名前は神でいいよ。それ以上でもないし、それ以下でもない存在が僕さ」

神？俺が思っているイメージとはかなりかけ離れているが、あの長い髭がついて雲に乗ってるのか

「そのイメージは多分仙人じゃないかな？確かにそういう神はいるにはいるけども、僕はこれでもまだナウい神なんだけどね」

心を読まれたのか、まあ神ならこれぐらい朝飯前つてところなんだろう。まあそれはそれとしてまず今の状況について理解するのが先だ

「神よ、ここはど何だ？どう見ようとも世界にはこんな場所は聞いたこともみたこともない場所だ」

「そうだね、君たちが言うには生と死の境界線つてとこかな。君はこのまま死ぬには惜しい存在なんだよ。だから僕の力で君を別の世界へ転生させようと思う」

転生？平行世界のこととは昔の書籍で解明されていたが

「君は魔法には興味があるかい？」

「魔法だと？それは空想のようなものがその世界にはあるのか」

「あるともさ、丁度君たちの時代とも近いからね。その世界で君はある高校に入学してもらおう。詳しい説明は君のその耳についている端末に送るよ」

「転生するのはわかった。それなりの準備もあなたがしてくれるのだろう」

「お、飲み込みがはやいねえ、それと、その世界では君の技は魔法と同じようなものだからそれを理解しておいてね。あと、君の必殺技がでやすいようにこの靴をあげるよ」

「この靴は？」

「向こうの世界で言うCADつて言う魔法を出すときに使う端末だよ。君の感覚で魔法式というものが展開される」

なるほど、魔法といってもあくまで科学的なものを使用しなければできないのか

「理解できたかな？それじゃあ転生つとその前に何か一つ君の願いを叶えようと思うのだけど何かあるかい？」

願いか、そうだな強いて言うならば…

「サッカーボール型のそのCADというものをもらいたい」

「了解したよ。それじゃあCADの組み立て方や、魔法式などもろのデータを送っておくよ。向こうの家に着き次第見るといいよ」  
俺は了解という形でうなずいた。

「あ、そういえば君とはずいじ連絡したいから僕の連絡先もいれておくね。それじゃあ新たな良い人生にならんことを」

神がそう言うのと、自分の視界は暗転した。

あの時のことがよみがえる。若いときの記憶、サッカーとの出会い、彼ら円堂カノンたちとの出会い、あんな出会いがまたあるのだろうか、いや出来るだろう。あの時とは違う、もう俺は友という存在がどこの世界でもいるのだから

「おはよー!!あ・さ・だ・よー!!」

うるさい!!」

て  
欠しぶりにひどい目覚めだ。こんな老いぼれをたたき起こすなんて

『君は今の体は高校生でしようが!』

ああ、そうだったな。確か、あの後視界が暗くなって、ここは? 『そこはこれから君が暮らす家だよ。お金は机に置いてある通帳に送っておくから金銭面は気にしないでいいよ。あと、CADとかその他諸々は君が作業しやすいようにつくった地下作業室に入れておいたから見てくるといいよ』

「総理大臣の時もここまでの優遇は無かったな。すまない神」

『いいよ、じゃあ問題があったらいつでも連絡してくれよ』

「わかった」

一言で返すと、そのままプツンという音をならし通信が切れた。さて少しは体を動かすか、俺はそう思いボールと共に外へと出た。

## 入学式Ⅰ

「ここが国立魔法大学付属第一高校か、高校にしてはかなりの広さだな。もはや大学に近いな」

俺はいまだに慣れることのない新たな世界で二度の高校の入学式を迎えるため、門をくぐった。

「納得できません！何故お兄様が補欠なのですか！入試の成績はお兄様の方がトップだったじゃないですか、本来なら私ではなく、お兄様が…」

あれは確か試験会場にいた、話から察するに二人は兄妹か？

「深雪!!それは口にしても仕方がないことなんだ。わかってるだろう?」

前にいる兄妹の間に暗い空気が流れた。なるほど、兄妹での格差か、確かにここは筆記よりも実技の方が優先されるからな、そう言うことが起きても仕方がないのか。

「今の子ウィードじゃない?」

少し歩いたときふと横から小言のようなことが聞こえた。よく見ると、先ほどの兄と呼ばれていた男がベンチに座っていた。

「ウィード」、雑草と書く二科生の総称と聞いていたが、「ブルーム」、花冠と書く一科生の差別意識がこれほどとはな。

「隣にいいか?」

「ああどうぞ」

「君も二科生か、同じだな」

「それは皮肉なのか?」

「まさか、俺の名前はバダップ・スリードだ」

「俺は司波達也だ。よろしく」

「よろしく達也、俺はバダップと呼んでくれればいい。そうだ、名前で呼ぶのはよかったかな?」

「ああかまわない」

「同じ二科生仲良くやろう」

俺が手を出すと、達也も手を握り握手を交わした。

「そういうえば先ほど達也と一緒にいた妹さんでよかったか？」

「深雪のことか？ああ、先程の話を聞いていたのか、騒がしくさせてすまないな。妹は先程答辞の打ち合わせに向かったよ」

「答辞ということは新入生総代か、兄として鼻が高いな」

「そうだな、出来のいい妹がいると嬉しいものだ」

「ふっ、達也はそう思うのか、いいことだな」

初めて会ったばかりだが、この男とは仲良くやれそうだな。

ピッ 『あと三十分です』

もうそんな時間か…

「新入生ですよね？」

俺と達也がベンチを立ち上がった時、前から声が聞こえた。

「そろそろ会場に向かった方がいいですよ」

「すみません、今いきます」

達也がその場で立ち尽くしている、よく見ると前にいる女の腕にはCADが見える。と言うことはこの人は—

「あつ、名乗っていませんでしたね。ごめんなさい。私は第一高校生徒会長、七草真由美です。あ、ななくさと書いて、さえぐさ、と読みます」

生徒会長？何故こんなところに…

「俺、いえ、自分は司波達也です」

「自分はバダップ・スリードです」

俺は達也に続き軽い挨拶を交わした。

「そう、あなた達が司波くんとスリードくんね…」

何故この人は意味がありそうな感じで頷いているんだ？

「先生がたの間ではあなた達の噂で持ちきりよ」

どういうことだ？達也は黙り込んでいるが、二科生への皮肉でも言うのかと思えばそうではないらしい。

「司波くんの方は入試試験七教科平均100点満点中96点。ス



リードくんは100点満点中二教科を除いて全て満点で平均も99点。そんな点数前代未聞の高得点よ?」

「ペーパーテストの成績です。情報システムの中だけですよ」

「そんなすごい点数、少なくとも私には真似できないわよ?」

達也も中々だな、流石あれだけの優秀な妹の兄だな。俺はその事に強く感心した。

そろそろ時間ですので…失礼します」

達也はまだ話したりなさそうな生徒会長にそう告げると、返事を待たず背を向けて歩いていった。

「会長、失礼します」

俺も会釈をすると、達也の方向へと向かった。

会場に入ると、もうすでに席の半分以上は埋まっていた。

「かなり埋まっているようだな、何処か空いてる場所は…」

「バダップ、こっちだ」

達也は後ろの丁度中央辺りの席に座っていた。俺は達也の横に座ると、壁の時計を見たりした。

「あの、お隣空いてますか?」

その時、自分達に声をかけてきた女子生徒がいた。

「どうぞ」

達也は優しい口調で返し、俺はジェスチャーで返答した。

ありがとうございます、と声をかけた女子生徒はこちらに会釈をし、腰をかけた。すると、その横に三人の女子生徒が腰を下ろした。

なるほど、多く空いてる席でなければその人数を集団で座ることは難しいだろう。だから一人の所ではなく、多く空いているここにしたのだろう。

「あの……」

先程声をかけてきた女子生徒がまた声をかけてきた。

「私、柴田美月って言います。宜しくお願いします」

突然の自己紹介に困惑した俺たちだったが、すぐに自分達も「司波達也です。こちらこそよろしく」

「バダップ・スリードだ。よろしく美月さん」

「おお、初対面の人に下の名前で呼ぶってすごいね。あたしは千葉エリカ。よろしくね司波くん、バタップくん」

先程話していた美月という女子生徒の奥から声が聞こえた。

「名前で呼ぶのはいけなかったか？気を悪くさせたならすまない」

「いえいえ!!」

「いやいや冗談だって、あたしも名前呼びの方がいいしね」

「そうか、あらためてよろしく」

最近の若者もこういった冗談を交えた会話などをよくやるのか？今も前の世界も似たようなものだな。

「でもさ、これって面白い偶然だと思わない？」

「何が？」

「だってさ、シバにシバタにチバでしょ？なんか語呂合わせみたいじゃない?」

俺ははいつていないのだが、多分これも冗談何のだろう。

「エリカちゃん、その、バダップくんが入っていないと思うのだけど……」

「あ、忘れてた。ついさつきひらめいちゃった事だからつい」  
本当に忘れていたのか、なぜだろうか少し心が痛い気がする。

「ごめんって、このとおーり許して」

そう言うと、エリカは顔の前で手を合わせ謝った。

「いや、謝る必要性はない。エリカが言ったさっきの語呂合わせはかなりうまかったよ。」

そう笑顔で言うと、その場の空気は和らいだ気がした。

二人の自己紹介が終わったところで、達也が

「四人は同じ中学なのか？」

と聞いたが、エリカの返答は意外なものだった。

「違うよ、全員さつき初対面」

意表をついたことが可笑しかったのか、エリカはクスクスと笑いながら説明した。

「場所がわからなくてさ、案内板とにらめっこしていたところに、美

月が声をかけてくれたことがきつかけ」

「…案内板？」

達也が疑問に思うのも無理はない。何故なら入学式のデータは会場の場所を含めて、入学者全員に配布されている。それに、仮に読んでいなくても携帯端末で見れるはずだ。

「あたしたち、三人とも端末持って来てなくて」

「だって、仮想型は禁止だって入学案内に書いてあるんだもん」

「せっかく滑り込めたのに、入学早々目をつけられたくないし」

「あたしは単純に忘れたんだけどね」

「そういうことか」

達也は呆れた口調でそう言った。まあ、俺も同感で全員に呆れていた。

『入学生の皆様お座りでしょうかー』

会場の方からアナウンスが聞こえ、俺達は気を張り直し、俺にとっては二度目の高校の入学式が始まったのであった。

## 入学式Ⅱ

入学式の新入生総代である達也の妹、司波深雪は新入生総代として堂々としながらも品があり、その答辞は以前の世界で総理大臣をしていたバダップにすら見事ともいえるものだった。

(いや、いい答辞だった。あそこまで堂々としている高校生は中々いるものでもないだろう。ふっ、まだ俺も昔の職業柄の癖が出ているな)

「司波君、何組?」

「E組だ」

達也の答えに

「やった!同じクラスね」

子供のように無邪気に飛び跳ねている姿は彼女自身の活気をあらわしているのだろう。

「私も同じクラスです」

エリカと正反対でリアクションが伴わない美月は内気な性格だと感じられる。

「バダップ君は?」

当然のような振りでこちらに回してきたが俺は

「同じくだ」

と軽めに返答を返した。クラスとしては知り合いがいるから学校生活にしては安心できるだろう。

「じゃあ、三人ともこれからよろしくね」

「ああ」

「うん!」

「そうだな」

この三人が友人ならば頼もしい限りだろう。やはり俺は恵まれているのかもな。

「どうする?あたしらもホームルームへ行ってみる?」

俺も美月もエリカも達也の方向を見た。

「悪い。妹と待ち合わせているんだ」

改めて中のよさを感じさせる兄妹だろう。確かに兄弟の中ではブボーもゲボーも似たような感じだったな。

「へえ……司波くんの妹なら、さぞかし可愛いんじゃないの？」

エリカそれはさすがに答えにくい質問だろう。

「妹さんつてもしかして……新入生総代の司波深雪さんですか？」

確かに今まで流してきたが、同級の兄妹というのはどういった感じなんだ？

「そういえば言われてみればそうだが、達也と妹さんは双子なのか？」

その返答に達也は意外な返答をした。

「よく聞かれるけど双子じゃないよ。俺が四月生まれで妹が三月生まれだ。それにしても良くわかったな。司波なんて珍しい苗字でもないはずだが」

達也の反問に、二人は小さく笑った。

「いやいや、十分に珍しいって」

「面差しが似ていますから……」

「確かに人と話すときの堂々とした姿は兄妹共に同じだな」

「何て言えばいいのか……」

エリカがどう表現すればいいのか四苦八苦していると、ふと美月が

「お二人のオーラは、凜とした面差しがとてもよく似ています。さすがに兄妹ですね」

「そう！オーラよ、オーラ」

エリカはその場で大きく頷いた。確かにそうも言えるが、その言葉自体は雰囲気と何ら変わらないのではと思えるものだった。

「千葉さん……君は実はお調子者だろ」

達也はエリカに苦笑しながら言ったが、エリカは、お調子者お？ヒドーイ、という感じに軽く聞き流された。

「お兄様、お待たせ致しました」

達也の背後の人垣に囲まれていた深雪が抜け出してきたのだった。しかし、それは達也が予定していた待ち人だけでなく、背後には予定外の同行者を伴っていた。

「こんにちは司波くん、スリードくん。また会いましたね」

達也と俺は入学式前に出会った人物に頭を下げた。そう、生徒会長・七草真由美がその場にいたのであった。

「お兄様、その方たちは……?」

「こちらが柴田美月さん。そしてこちらが千葉エリカさん。後ろにいるのがバタツプ・スリードだ。同じクラスなんだ」

「そうですか…早速、クラスメイトとデートですか?」

これは、不味いな。達也、妹さんの目が全く笑っていないんだが、仕方がないフォローをいれた方がよさそうだな。

「達也の妹さん、それは俺も入っているのか?」

突然、それを真顔で言ったためか、その場にいた全員が驚いたような顔で見た。

「そんなわけないだろ、深雪。それと冗談はよしてくれバタツプ」  
達也は呆れた顔だったが、そのまま話を続けた。

「深雪を待っている間、話していただけだ。そう言う言い方は三人に対して失礼だよ?」

すると我に返ったかのように司波深雪は一瞬ハツとした表情を見せたが、すぐにその顔は可憐な笑顔へと変わっていった。

「はじめまして柴田さん、千葉さん、スリードさん。司波深雪です。私も新入生ですので、お兄様同様、よろしく願いますね」

「柴田美月です。こちらこそよろしく願います」

「よろしくあたしのことはエリカでいいわ。貴女のこと深雪って呼ばせてもらっていい?」

「ええ、どうぞ。苗字では、お兄様と区別がつきにくいですものね」  
三人は改めて自己紹介した。達也はエリカの気さくさを心配していたようだが、気にしていない様子でほっとしているのだろう。

「あはっ、深雪って見掛によらず、実は気さくな人?」

「貴女は見た目通りの、開放的な性格なのね。よろしく、エリカ」

どこかしら気が合うところがあったのだろう。二人はすっかり打ち解けている雰囲気があった

「それと、あなたは？」

「そうだな、俺も改めて自己紹介をしなければな

「俺はバダップ・スリードだ。以前はバダップと呼ばれていたからそう呼んでくれると助かる。よろしく深雪さん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

これで、全員の自己紹介は済んだな。そういえば、会長を待たせていたな

「深雪。生徒会の方々の用は済んだのか？まだだつたら適当に時間を潰しているが」

「大丈夫ですよ」

「今日のご挨拶させていただいただけですから。深雪さん：私も呼ばせてもらっていいかしら？」

「あつ、はい」

「では詳しいお話はまた、日を改めて」

生徒会長は軽く会釈して講堂を出ていった。しかし、その背後にいた男子生徒は何か言ってるようだったが、軽い舌打ちが聞こえた後、そのまま生徒会長と共に人混みの中へ消えていった。

「……さて、帰ろうか」

「どうやらこの学校には上層の生徒会でも差別意識があるらしいな。人の関係においてどこの世界でも差別意識が出てしまうのは何としても改善しなければいけないな。」

「すみません、お兄様。私のせいでお兄様の心証を」

「お前が謝ることじゃないさ」

「どうやら達也達も先程のことを考えているのだろう。」

「せっかくだから、お茶でも飲んでいきませんか？」

「いいね、賛成！美味しいケーキ屋さんがあるらしいんだ」

何かしら話題を変えようと出てきたのは、ティータイムの誘いだっ

た。

「入学式の会場の場所はチェックしていなかったのに、ケーキ屋は知っているのか？」

「当然！大事なことでしょ？」

自信満々にエリカは言った。

「同然なのか……」

達也と俺はハモるような形でエリカに呆れた。

「お兄様どういたしましょうか？」

「いいんじゃないか。せっかく知り合ったことだし。同性、同年代の友人はいくらいても多過ぎるということはないだろうから」

「司波くんって、深雪のことになると自分は計算外なのね……」

「妹さん思いなんですネ……」

「兄妹の仲が良いのはいいことだ」

俺はいたって真面目によいと思っただが、達也自体は褒められてるのか、呆れられているのか、多くの眼差しを前に苦い顔をするしかなかった。

エリカの勧めの「ケーキ屋」では、実際にはそうではなく、「デザー  
トが美味しいフレンチカフェ」だったため、時間からか、その場で昼  
食をとった。会話としては三人の女子が主体でしゃべるとい  
うものではあったが、達也がいてくれたおかげで、自然にその中  
でも話にはいつていけ、有意義な時間はあつという過ぎていき、その場で全員は  
解散となった。

夕方の空、家に帰る帰路を歩いていると、

ウマクイカナイコトガアツテモくくヨクヨクヨシテモハジマンネー

ダロ♪

端末から着信音が鳴り、俺は迷わずそのコールに応答した

『やあ一日お疲れちゃんちゃらちゃん』



「ふっ、中々有意義な時間を過ごさせてもらった。二度目のこの生活も悪くはないな」

『気に入ってくれて結構、結構。そうそう、まだ君に言い忘れていたことがあるんだよ』

「うん？どんなことだ」

『君が築き上げた力、つまり君と以前いた仲間たちの証であるあれは、いつでも発動できるから、自分がここぞっていうときに使えばいいと思うよ』

「それは朗報だな、あれは俺達とサッカーを通しての絆のようなものだ。連絡助かる」

『いいよ、それじゃあまた連絡するねえ〜♪』

プツン

連絡は途絶えた。そしてまた俺は歩き出す。空は茜色に輝いていた。

## 入学式Ⅲ

「ふう、久しぶりだな、ここまでくつろげるのは」

今までの仕事上、国民のため、国のために忙しく回っていた時間に、またこうして落ち着ける日が来るとは思ってもいなかった。

まだ就寝には程遠い時間か、ならCADの性能を試すのも悪くないだろう。

その後、バダップは自分のCADを調節と試験を繰り返しておこない、就寝した。

「オハヨー」

高校生活も二日目になり、昨日と同じように登校をし、教室の扉を開くと

「オハヨー」

「おはようございます」

昨日、知り合ったエリカ、美月が声をかけてきた。その雰囲気はまたどこことなく懐かしさを感じさせた。

「おはよう、エリカ、美月」

軽い挨拶の後、自分の番号がある席を探した。席はエリカの席の斜め後ろにあり、知り合いが近くにいることに少し気が楽になった気がした。

ガラッ

扉が開いた方向を見ると、登校してきた達也がいた。

「おはよう達也」

「オハヨー」

「おはようございます」

全員同じ挨拶ながらもなぜか統一感がないのは個々の持った性格の現れなのだろう。登校してきた達也は少し笑ったように見えた。

達也の席は美月の横の席だったため

「また隣だが、よろしくな」

「ごちらこそ、よろしく願います」

と改めての挨拶をした。その言葉に美月は笑顔で返した。

「私達は仲間はずれ？」

エリカは達也をからかうかのような言い方をしたが、達也自体はすました顔で

「千葉さんを仲間外れにすることはとても難しそうだ」

と言い、一変してエリカが悔しそうな顔をした。

「…司波くんって、実は性格悪いでしょ」

「どちらも同じだな」

俺は二人の会話で思わず笑ってしまった。すると美月も笑いをこらえていたのかクスクスと笑っていた。

「…バダップくん、それはどういう意味かな」

「いじられる側というよりもいじるほうが好きな性格だろ？」

エリカはムスっとした顔をしたが、本気にはしてないようだった。達也はその会話を横目にインフォメーションチェックを始めた。

俺もやった方がよさそうだと思い、俺は端末にIDカードをセットし、以前の世界で使っていた目を全体的に覆う形状をした二つのリングが並んだ円冠状の器具を頭にセットした後、それが作動するようプログラムされた機器も端末にセットした。

俺は素早くチェックと受講登録を済ませた。器具を頭からはずし、同じくやっていた達也を見ると、達也もどうやら全て終わったらしく、軽く息を吐いた。

「…別に見られても困りはしないが」

達也は目線を前へと向けた。見ると、前の席で達也の手元をのぞきこんでいる男子生徒がいた。

「あつ？ああ、すまん。珍しいもんでつい見入っちゃった」

「珍しいか？」

「珍しいと思うぜ？今時キーボードオンリーで入力する奴なんて、見るのは初めてだ」

確かに以前の世界でもキーボード入力だけでやる者はみななかったな。

「慣れればこっちの方が速いんだがな」

前方の生徒からは、「それで食っていけるんじゃないやあ」と言ったが、達也は「アルバイトがせいぜい」と卑下した。

「それに、俺も珍しいと思うやり方をしている奴がいるからな」と、俺の方を横目で見た。

「確かに、あいつのスピードも凄かったからな」

「バダップ、その機器はどうゆうものなんだ？」

達也は俺の機器を興味深そうに見た。

「これはキーボードで打った文字を脳内で変換したいと思った文字に素早く変換するするもので、変換の正確さはトップクラスだと思うぞ？」

「だが、脳内変換の機器にその形状のものは見たことがないのだが」  
「これは俺の自作だ。もっとも自分で調節できないのは嫌いだからな」

「それこそ十分に食べていけると思うが」

先程達也の前にいた男子生徒は目を丸くしていた。

「……おっと、自己紹介がまだだったな。西城レオンハルトだ。お袋がクオーターの所為で、外見は純日本風だが名前は洋風、得意な術式は収束系の硬化魔法だ。レオでいいぜ」

「司波達也だ。俺のことも達也でいい」

「バダップ・スリードだ、バダップと呼んでくれ。よろしくレオ」

俺は左手を前に出すと、「おうよ!!」と力強く握手を交わしてきた。

「それで、達也、バダップ、得意魔法は何よ？」

「実技は苦手だな、魔工技師を目指してる」

「なーる…頭よさそうだなもんな、お前」

「え、なにに？司波くん、魔工技師志望なの？」

「達也、コイツ、誰？」

話に首をつ込んできたエリカに、レオは引き気味で言った。これは討論が始まるな、俺はそう察すると、思った矢先に口論が始まった。

「それで、バダップ、お前は？」

達也はその口論をもつともしないように冷静な顔で聞いてきた。

……俺の目指すものか。そうだな、俺の選択肢としてはやはりこの世界でも

「俺も実技は苦手で、俺は…政治家を目指している」

達也は驚いた顔をしたが、横で聞いていた美月も同じように驚いた顔をした。

「珍しいな、普通は魔法に関連した仕事につきたいというのが普通だが」

「俺は、大きな視野で世界や物事を見る為に、まずその近くで今世界で一番必要とされる力である魔法を詳しく知るためにはいった」

「そうだったんですか…それとエリアちゃん、もう止めて。少し言い過ぎよ」

「レオもやめておけ。今のはお互い様だし、口じゃ敵わないと思うぞ」

美月と達也の仲裁により、二人の口論は収まった。

「…それで、バダツプお前は何が得意なんだ？」

「そうだ、まだバダツプくんの方お聞いてないじゃない」

二人が口論している間に話した事をまた聞こうと迫ってきた二人に、俺は切れた

「お前たちには少し頭を冷やさないと」

その後、予鈴が鳴るまで、バタツプはまさに鬼のごとく説教をし、達也からは自業自得とあきれられ、美月からは水晶眼でバタツプのオーラから赤黒いものを感じとった。そして説教をされた二人はしばらく無言のままだった。

## 入学式Ⅳ

本鈴が鳴り、教室では異様なまでにぎわっていた。その理由は、本鈴直後に、前側のドアが開き、スーツを着た女性が入ってきたからであった。女性の名前は小野遥、学校での総合カウンセラーという簡単に言えば、相談相手となり、その問題を適切な専門的カウンセラーに相談させるといった職業の人物だった。

ある程度の紹介の後、希望者は退室してもよいということになった。

「達也、昼までどうする?」

達也の前席のレオが、達也に声をかけていた。

「ここで資料の目録を眺めているつもりだったんが……OK、付き合うよ」

「レオは何を見に行くんだ?」

俺は二人に声をかけた。レオは少し引くかと思っただが、切り替えが早いのか、先程の説教を気に止めてないようだった。

「工房に行ってみねえ?」

「闘技場じゃないのか?」

俺の予想ではレオは闘技場を言ってくるかと思っただが、達也も同じことを思っていたようだった。

レオはニンマリと笑うと

「硬化魔法は武器術との組み合わせで最大の効果を発揮するものだからな。自分で使う武器の手入れくらい、自分でできるようになってきたいんだよ」

レオ自身はかなり将来に向けてのことを考えてるらしい。こういう面での性格は仕事をしていてもいい人材になることだろう。

「工作室の見学でしたら一緒にいきませんか?」

3人の話し合いを聞いていた美月が同行の申し入れがあった。

「柴田さんも工房の?」

「ええ…私も魔工師志望ですから」

「バダップはどうする?」

レオが俺の同行を気になっていたようだが

「すまない、俺は図書館へいくよ。ここの図書館は多くの知識を学べそうだからな」

「そうかあ…」

わかりやすいように肩を落とすレオを見て、俺は思わず苦笑した。

俺はその後、達也たちと別れ、図書館へと向かった。

図書館の中に入るとおびただしい棚と、並べられた本の数々が所せましに置いていた。

「中々の数だな、今日は少しにしておいて後はまた後日か、借りていくか」

俺はひと時の時間を図書館で過ごした。

なるほど、会長の七草先輩は数字付き（ナンバーズ）という家系なのか、魔法師としての才能は、遺伝的素質に大きく左右されるとはあるが、この日本においては苗字に数字を含む十師族が現在のトップを滑るものなのだろう。それよりも俺が驚いたことは、この世界の戦争の数である。俺がいた世界ではここまでの状況にはなっていないかった。これが魔法か、やはりこの世界力による武力行使の思想が強すぎるとブルームという差別意識を無くさなければならぬ。まずはウィード

俺は本を閉ざすと、二冊本を借り、図書館を後にした。

「いい加減に諦めたらどうなんですか？深雪さんは、お兄さんと一緒に帰ると言っているんです。他人が口を挿むことじゃないでしょう」

図書館から出て、校門の方へ向かうと、聞き覚えのある女子生徒の怒声が聞こえた。

状況を見ると、達也たちと、一科生がどうやらもめているようだった。

「達也何かあったのか？」

「別に深雪さんはあなたたちを邪魔者扱いなんてしてないじゃない

ですか。何の権利があつて二人の仲を引き裂こうとするんですか」  
美月がここまで感情をだしていることに驚いたが、次の言葉からそうなるのも当然だというものだった。

「引き裂くとか言われてもなあ……」

「僕たちは彼女に相談することがあるんだ！」

「そうよ！司波さんには悪いけど、少し時間を貸してもらっただけなんだから！」

自分勝手な言い分でまとめようとしているが、それでは何の理由にもならない。むしろ司波妹が今の状況で一科生と一緒に帰ることが、彼女と彼らとの溝を深めかけない。

「君達は普段からクラスで話し合うことができないほど時間に余裕がないのか？俺達の方では話し合いができる時間はいくらでもあつたはずだが？」

「うるさい！他のクラス、ましてやウィードごときがブルームに口を出すな！」

あまりに暴言で横暴な態度をとる一科生に俺は呆れてしまった。横にいた美月は怒りをあらわにした。

「同じ新入生じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですか！」

その言葉が種火になったのか、一人の一科生が

「どれだけ優れているか、知りたいなら教えてやる」

と嫌な笑みを浮かべながら言った。まずいな、下手をしたら魔法が人に向けられる。そう直感した矢先、

「ハッ、おもしれえ！是非とも教えてもらおうじゃねえか」

と売り言葉に買い言葉、その発言からその場にいた一科生はヒートアップしていった。

「だったら教えてやる！」

そう発言した一科生は手元から小型拳銃を模した特化型CADを出し、レオに銃口を向けた。明らかに危険行為、いやもうこの時点で犯罪行為である。今の状態はいわば刃物を相手に向けているような



ものであり、下手をしたらけがでは済まされないものである。

「バチン!!」「ヒツ……!」

小さい悲鳴が聞こえると、銃口を向けていた一科生の手元からCADが弾きとんだ。

「この間合いならく体を動かした方が速いのよね」

CADを弾いたのはエリカだった。エリカの手には警棒のようなものを握っており、その身のこなしは、疾風のごとく、一瞬のものだった。

「達也、俺は他の一科生を無効化する、その後は何とか場を収めてくれないか」

達也の耳元で小声で話すと

「策はあるのか?」

と達也が聞いてきた。俺は短く

「ある」

と答え、少ししやがみ、足に触れた。

ブォーン

足に魔法式が展開された。時間と視線誘導はレオとエリカの口喧嘩を繰り広げていたおかげで稼げた。

俺は少し前に一步を踏み出した。

「スプリントワープ」

ビョーンビョーンビョーン

俺は一科生の間を高速で隙間を縫いながらすり抜けた。

俺は一番後ろの一科生の背後で止まり、それと同時に後方から何か割れるような音がした。振りかえると、先ほど達也に言った女子生徒が、もう一人の女子生徒によりかかる状態になっていた。

「やめなさい!自衛目的以外の魔法による対人攻撃は、校則違反である以前に、犯罪行為ですよ!」

強い声が聞こえた方向を見ると、一科生の顔は蒼白になっていた。声の主、生徒会会長・七草真由美と、生徒会のメンバーの数名がその場にはいた。彼女の手からはサイオンの光が輝いていた。

「風紀委員の渡辺摩利だ。事情は聞きます。全員ついてきなさい」

風紀委員か、この場を収めてくれるのはいいが、どう言い分をつけるべきか…

「すみません、悪ふざけが過ぎました」

泰然とした足取りで妹と共に、達也が摩利の前へ歩み出た。

「悪ふざけ？」

その場の光景では疑える発言を唐突にし、摩利の眉が軽くひそめられた。

「はい。森崎一門のクイツクドロウは有名ですから、後学のために見せてもらうだけのつもりだったんですが、あんまりに真に迫っていたもので、思わず手が出てしまいました」

なるほど、だが、先程魔法しようとしたあの女子生徒の言い分はどうする達也。

「ではその後に1—Aの女子が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ？」

「攻撃といっても、彼女が発動しようと思図していたのは目くらましの閃光魔法ですから。それも、失明したり視覚障害を起こしたりする程度のレベルではありませんでしたし」

「ほう……どうやら君は、展開された起動式を読み取ることが出来るらしいな」

魔法式は情報量の塊のようなものだが、その量は読み取れるほどの量ではないほど膨大なものだ。つまり不可能に近いものなのだ。いったい何者なんだ達也。

「実技は苦手ですが、分析は得意です」

「…誤魔化のも得意のようだ」

「摩利、もういいじゃない。達也くん、ホントに見学だったのよね？魔法の発動を伴う自習活動は、一学期の授業で教わる内容です。それまでは控えた方がいいでしょう」

「会長がこう仰られている事でもあるし、今回は不問とする。以後このようなことがないように」

摩利は一步を踏み出したが、その場で背中を向けて聞いてきた。

「忘れるところだったが、一科生の後ろにいる二科生、君は何をやっ

ていた?」

気づかれていたか、まあ、俺も誤魔化すでしょう。

「いえ、万が一のために念のためCADを回収をしていただけですよ」

バダップの手の中にはその場にいた魔法を発動しようとしていた女子生徒以外の全てのCADがあった。先程の高速移動時に、CAD解除と同時に回収を行い、全員を無力化したのだった。

「君の名前は?」

「二年E組、バダップ・スリードです」

「君もだ」

そう言うと、達也の方を少し見た。

「同じく一年E組、司波達也です」

二人の名前を聞くと「覚えておこう」と言い残し、生徒会はその場を後にした。

## 入学式V

生徒会のメンバーが去った後、一科生の一人である森崎という男子生徒に捨て台詞を吐かれ、険悪な印象を持たれながら一科生はその場を解散していった。

「お兄様、もう帰りませんか？」

「そうだな。バダップ、レオ、千葉さん、柴田さん、帰ろう」

俺はともかく、他の全員は精神的にも疲れただろう。俺達はその場を離れることにした。しかし、その場を遮るようにある女子生徒が立った。

「光井ほのかです。さつきは失礼なことを言つてすみませんでした」

この女子生徒は確か、魔法を発動させようとしていた…。ほのかという女子生徒は深々と頭を下げた。

「庇つてくれて、ありがとうございます。大事にならなかったのはお兄さんのおかげです」

先程の一科生とは一変して、礼儀正しい優しい口調をしたものだった。

「どういたしまして。でも、お兄さんはやめてくれ。これでも同じ一年生だ。名前は達也でいい」

「分かりました。それで…その、駅まで一緒にしてもいいですか？」  
同行の許可を願うほのかに、全員が互いに顔をみあった。別に拒む理由も道理もない俺達はそれを了承した。

「えっ？その警棒、デバイスなの？」

俺達は少し歩いたのち、空気の悪さから、少しでも変えようと先程のことを話し合いに出した。

「普通の反応ありがとう美月。みんなが気づいてたんだったら、滑つちやうところだった」

エリカの持っている警棒がデバイスなのはわかっていたが、その後

の話でエリカはデバイスの振り出しと打ち込みの一瞬だけにサイオンをいれていたという荒業だった。その時全員はこの学校自体が、普通ではない有力な生徒を集めていると再確認した。

「あ、そういえばバダップくんはどうやって一科生の後ろまで行ったの？」

「そうだな、あそこまで行くのもそうだが、全てのCADも回収するのはかなりのことだが」

先ほど話題から全員が俺の方に視線を向けた。

「ああ、あれは加速魔法とただ武装を解除、いや簡単に言えばスツたといったほうがわかりやすいのか？」

全員が首を捻り、達也からは指摘があった。

「待て、魔法式を展開していたのなら誰かしらが気づくはずだが」  
指摘はもつともだったが、バダップの答えは単純なものだった。

「気づかなかったのは俺が持っているデバイスに秘密があるんだが、俺のデバイスはこの靴自体なんだよ」

バダップは靴の方に指を指すと、軽く魔法式で弱い風をふかせた。どうやら達也は気づいたようだな。

「そのデバイスは、靴の裏に魔法式が展開されているのか」

「正解だ、達也。俺のデバイスは魔法式を展開するときには相手に見えないように靴裏に展開するように調整してある。単純な魔法式なら足の裏で十分だが、大きいものを出す場合は服の内側に展開する」

CADの形として、ほとんどは腕に装備するように設計されているが、バタップのデバイスは足に装着するように設計されているため、誰もが考える概念を壊すものであった。

「なるほど、そりゃあわからないな。でもよ、それでもあの距離を高速で移動するのは並のサイオンの量じゃあできないぜ？」

レオの指摘は最もだった。足にCADを装着していたとしても、あの移動は一科生の域も超えていた。

「いや、そうでもない。ポイントごとに複数の反発魔法を置いておけば加速ができる。エリカが力をいれるときにサイオンを流すよう

に????? 俺もそのポイントにだけサイオンをいれているだけだよ」  
その発言に、全員が苦笑いするしかなかった。

その後、俺は駅でエリカやレオたちと別れた後、自分も帰ろうとしたが、達也が突然声をかけてきた。

「少しいいかバダップ」

「どうした達也?」

先ほどの会話の時とは一変して、達也の顔は強張った表情をしていた。

「お前は一体何者なんだ? お前の魔法式からは何の術式も構築されてなかった。その魔法式には0しか入っていないなかった」

さっきのはやはりハツタリじゃなかったか。達也も並の人間じゃなさそうだな。

「本当に魔法式を読み取れているんだな達也。隠すこともなかったが、色々な情報からこの能力は面倒事になりそうだったからな」

「どういう事ですか?」

「俺は二科生であって、二科生じゃないということですよ」  
だがまだ、話すべきじゃないか。いずれ話すときがくるかな。

「それは…」

「また明日、達也、深雪さん」

「待て、話は終わって…」

「ヘブンズタイム」

バダップが指を鳴らしたと同時に達也と深雪の動きは止まった。

(これは!?)

達也の意識は止まった時間でもしっかりと保っていた。しかし、達也はバダップから魔法式を読み取る。起動すら気付かなかった。しばらくして、達也と深雪の体の硬直が解けると、そこにバタップの姿はなくなっていた。

「お兄様…」

「あいつの能力は不明な点が多い、俺達の脅威となるのなら排除す

るまでだ」

## 入学式VI

『お前は一体何者なんだ?』

達也の眼からは明らかに警戒的なものだったな。あの眼は何かを守るための忠誠心からでる眼と、常に脅威が近くにある者の仕草だ。しかし、あいつは何に気を張っているんだ? 妹を守るためという理由はあり得なくもないが、それでもあの警戒は異常といえるだろう。できれば達也とはこれからも仲良くいきたいが、昨日の会話の切り方がいけなかったな。自分にも非があるか、早めに説明しておこう。

そう思いながら、朝食を食べ、家を出た。

「バダップくん、オハヨ〜」

学校へ登校をすると、校門前で聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「七草会長、おはようございます」

会長はともかく、司波兄妹といつものメンバーと登校時間が重なった。達也の顔を見ると、まだ警戒的な雰囲気だった。

「みんな、おはよう」

全員に挨拶を交わした後、達也たちも軽く挨拶を返してきた。

今の状況は、どうやら七草会長が司波兄妹を生徒会室で昼食を一緒にとらないかという誘いだが、エリカが『遠慮する』ということと言った後、気まずい空気が流れている状態だった。

「じゃあ、深雪さんたちだけでも」

会長は先ほどの拒絶に動じることなく笑顔のままそう答えた。その問いに深雪さんは少し考えているようだったが

「……分かりました。深雪とお邪魔させていただきます」

「バダップくんはどうかしら?」

会長はじと目でこちらを見ながら問いかけてきた。これは、俺も行くべきだろう。断れなさそうだからな。

「では俺もお邪魔させていただきます」

そう答えると、「お待ちしていますね」と会長はそう言い、その場を



後にした。

「いらっしやい。遠慮しないで入って」

司波兄妹ともに生徒会室に入ると、会長に手招きされる形で椅子に腰をかけた。

「入学式でしましたけど、念の為、もう一度紹介しておきますね。私の隣が会計の市原鈴音、通称リンちゃん」

「…私のことをそう呼ぶのは会長だけです」

容姿やたまたまいは大人びた印象を受ける市原先輩には似合わないあだ名だと思うが、どちらかと言えばやはり先輩という単語が付属したほうがイメージあっているといえる。

「その隣は知っていますよね？風紀委員の渡辺摩利。それから書記の中条あずさ、通称あーちゃん」

「会長…下級生の前で『あーちゃん』は止めてください。私にも立場というものがあるんです」

小柄な容姿と、幼いような顔立ちからこのあだ名はかなりあっていると覚えてしまうが、それは心の中にしまっておこう。

「もう一人、副会長のはんぞーくんを加えたメンバーが、今期の生徒会メンバーです」

なるほど、だいたいメンバーは理解した。だが、なぜ俺は呼ばれたんだ？深雪さんはともかく、達也と俺はどうしてなんだ？

「私は違うがな」

「そうね。摩利は別だけど。あつ、準備ができたようです」

生徒会室においてあるダイニングサーバーから5つの料理が乗ったトレーが出てくると、全員の昼食が始まった。

「そのお弁当は、渡辺先輩がご自分でお作りになられたのですか？」  
「そうだ。…意外か？」

この時期に料理が一人前にできるのは、中々いない。以前いた世界でも、弁当を高校生一人が毎日作っている人物はいなかったに等しい。ただ、渡辺先輩からはあまり意外という感覚は雰囲気からなかつ

た。

「そういえば、君も弁当だな」

渡辺先輩が、こちらへと話の話題をふってきた。俺の場合は単に以前の生活の癖が抜けていないだけだが

「毎日、全ての食事でバランスを考えたほうが健康的に過ごせますから。意外ですか？」

先ほどの先輩の言葉をオウム返しのように言った。

「いいや、君ならできそうだし、全てこなせそうだからな」

その後の会話というと、再び話題の主軸は司波兄妹へと戻り、達也の妹愛が炸裂し、話のキリがなくなっていくた。

「そろそろ本題に入りましょうか」

一時的に盛り上がっていた会話を唐突ながらも会長の言葉で切り上げた。

「当校は生徒の自治を重視しており、生徒会は学校内で大きな権限を与えられています。生徒会は伝統的に、生徒会長に権限が集められています。生徒会長は選挙で選ばれますが、他の役員は生徒会長が選任します。解任も生徒会長に委ねられています。これは風紀委員も同じです」

なるほど、風紀委員も委員長が生徒を選任できるのか、確かにそうでもしなければ、会長になった際の抑止力がなく、まともにまとめることが出来なければ、学校全体のバランスも崩れるだろう。

「これは毎年の恒例なのですが、新入生総代を務めた一年生は役員になってもらっています」

なるほど。わかっていたが、やはり深雪さんを勧誘することが目的だったのだろう。さしずめ達也と俺は、会長の気まぐれで誘われたものだろう。

「深雪さん、貴方を生徒会に入ってくださいることを希望します。引き受けてくれますか？」

会長の問いかけに、深雪さんは達也の方を1度向き、達也はそれに

対し、小さく頷いた。

「わかりました。精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願い致します」

その言葉に、その場にいた全員は安堵の表情を見せた。達也も、少し嬉しそうな笑顔をしていた。

「それでは、深雪さんには書記として、今期の生徒会に加わっていただきます。それじゃあもう少し時間があるし、お話でもしましょうか」

会長が軽く手を合わせると、そこで話が終わる…はずだった。

「ちよつといいか」

おもむろに手を挙げていたのは、渡辺先輩だった。

「風紀委員会の生徒会選任枠のうち、前年度の卒業生の二枠がまだ埋まっていない」

俺はその発言から大体のことが察することができた。会長達はまだわかっていないが、これは…

「第一科の縛りがあるのは、副会長、書記、会計だけだったよな？つまり、風紀委員の生徒会枠に、二科の生徒を選んでも規定違反にはならないわけだ。」

突拍子もないことに俺以外…いや、俺と会長以外は啞然とした顔をしていた。

「摩利、貴方…ナイスよー！」

会長の目は大きく開き、声も跳ねるような雰囲気になっていた。

「そうよ、風紀委員なら問題ないじゃない。摩利、生徒会は可波達也くんを指名します」

「私は君を指名しよう」

そう言うと、渡辺先輩は俺の方を向いた。

「ちよつと待つてください！俺達の意味はどうなるんですか？大体風紀委員が何をする委員なのか」

「達也。まだ、深雪さんも生徒会の仕事については話してないぞ？」

俺は冷静に矛盾点を言うと、達也の顔はいたるところを突かれ、険しいものになっていった。

「風紀委員の主な任務は、魔法使用に関する校則違反者の摘発と、魔法を使用した争乱行為の取り締まりだ。例を上げるとすれば、警察と検察を兼ねた組織みたいなものだ」

仕事の説明したのは渡辺先輩だった。頬が少し上がっているものから達也を面白がっているのがわかった。深雪さんも目を輝かせて達也を見ていた。

その後、達也の抗議は続いたが、先輩達の返答に全て返され、話の続きは放課後となった。

達也、そう気を張るな。もう断ることはまず難しいだろう。受け入れた方がいい」

達也はどうも乗り気ではなく、かなり嫌々なのは見ていてわかった。だが、俺達は生徒会室の前に来てしまった以上逃げられないのはわかった。

「失礼します」

生徒会室に入ると、視線を下げていた男が、視線を下げ、こちらの方へ近付いてきた。顔を見て俺はすぐにわかった。生徒会副会長の服部刑部先輩だった。

「副会長の服部刑部です。司波深雪さん、生徒会へようこそ」

そう言うと、握手を交わそうとしたが、それをやめ、俺と達也を無視したまま席へと戻って行った。

「よっ、来たな」

「いらっしやい、深雪さん。達也くんもご苦労様」

慣れているのかどうかわからないが、渡辺先輩と会長はそんな副会長の言動を気にも止めず、話は進められた。

「早速だけど深雪さんこちらに来てもらえる？あーちゃんお願いね」

「…はい」

ぎこちない顔をする中条先輩だったが、すぐに諦め、深雪さんを端末の方へ誘導した。

「じゃあ、あたしらも本部に移動しようか」

そう、渡辺先輩が言うのと、風紀委員会本部へと向かおうとした。

「渡辺先輩、待ってください」

呼び止めたのは服部副会長だった。

「どうしたの？はんぞーくん」

会長は不思議そうな顔で言った。

「その一年生二人を風紀委員の補充に任命するのは反対です」

生徒会では一科生と二科生を差別すると言ったことはないとは思っていたが、まさか副会長がやるとはな。少なからず気づいてはいたが。

「おかしなことを言う。司波達也くんを生徒会選任枠で指名したのは七草会長だ。そしてバダップ・スリードくんは私が選任した。この二人にはそれなりの実力がある。それは会長や私が見て確認済みだ」「何ですって…!!」

服部副会長は予想外といわんばかりの表情を見せた。

「しかし、渡辺委員長の本張があるとしても、風紀委員の本来の任務は、校則違反者の鎮圧と摘発です。魔力の乏しい二科生に風紀委員は務まらないと思います」

「待ってください！」

振り返ると、兄への冒険に耐えきれなかった深雪さんが口を開いた。

「せんえつですが副会長、兄は確かに魔法実技の成績が芳しくありませんが、実戦ならば兄は誰にも負けません」

深雪さんの言葉に服部先輩は、

「深雪さん、身内に対するひいきは、一般人ならばやむ得ないでしょうが、魔法師を目指す者は身ひいきに目を曇らせることのないように心がけなさい」

その瞬間、一瞬だけだが、達也から殺気が漏れたような雰囲気があった。

「お言葉ですが、わたしは目を曇らせてなどいません！お兄様のー」

「深雪」

鋭く張りのある全体に聞こえる声で、妹の言葉を制止した。

「服部副会長、俺と模擬戦をしませんか」

達也の意外な申し出に、その場の全員が呆気にとられたような顔をした。

「思い上がるなよ、補欠の分際で！」

服部先輩の顔からは激しく血が上っている状態で、激しい罵声が出た。

「別に、風紀委員になりたいわけじゃないですが…妹の目が曇ってないと証明する為ならば、やむを得ません」

達也の言葉は独り言のように小さかったが、それはかなりの挑発的な態度だった。すると、会長がそこで口を挿んだ。

「私は生徒会権限により、二年B組・服部刑部と一年E組・司波達也の模擬戦を、正式な試合として認めます。時間はこれより三十分後、場所は第三演習室、試合は非公開とし、双方にCADの使用を認めます」

会長がそう宣言すると、その場には殺気と、はりつめた空気が流れた。時間が経ち、先ほど生徒会室にいたメンバーは、第三演習室に全員が到着していた。試合に関しては渡辺先輩のルール説明の後、達也は拳銃型のCAD、服部先輩は腕輪型のCADで試合に望んだ。結果をのべるならば、勝ち得ない方が勝ったと言いきらさう。そう、勝ったのは達也の方だった。CADでの戦闘をイメージしていた服部先輩は、達也の身体能力の面を想定していなかった。今の俺の感じている達也の印象とすれば、常人とはかけ離れた何かに見えてしまっていた。しかし、昔の自分だったらたじろいてる所、今の俺にとっては気にするまでもないことだった。まあ、服部先輩とも和解も済み、俺としては解決と言いたかった。

「それじゃあ、生徒会室に戻りましょうか」

会長の言葉に全員がその場所から立ち去ろうとした時だった。

「少しいいか？」

この場で突然声をかけたのは、またも渡辺先輩だった。

「どうしたの摩利？」

「バダップくん。私はまだ君の実力を把握できていない。もちろん君の以前の実力である程度の腕があることはわかる。どうだろうか、私と模擬戦をしないか？」

意外な言葉に俺も驚いたが、他の全員も驚きを隠せないでいた。

「確かにバダップくんの実力も見たいけど、でも相手が摩利だと…」

「俺は別に構いませんが」

「うん、そうよねってえええ!？」

俺としては別に断る理由もないし、何より先ほどの理屈だと俺自身が本当のひいきされている対象になりかねないからな。

「バダップ、本当にやるのか？」

「ああ、俺自身もここで断ると、服部先輩に言われてしまうからな」

「まあいいわ。それじゃあ今から十分後に同じルールの正式試合と  
いうことでいいわね」

「私はそれでいい」

「俺も構いません」

こうして、俺と渡辺先輩との模擬戦が始まろうとしていた。